

幼児による自己と友人の認識に関する研究の動向と展望

— 友人選択や社会的比較の観点から —

渡辺大介

(2009年10月6日受理)

Children's Self-cognition and Friendship
— Friendship choice and social comparison —

Daisuke Watanabe

Abstract: In contrast with a classic view that young children select friends based simply on physical proximity, young children's choice of friends might be closely related to their self-cognition and cognition of friends. To reveal this question in this study, I review research of young children concerning three themes: cognition of self and friends, friendship choice, and social comparison. First, I focus on young children's cognition of self and friends, especially on self-evaluation and their evaluation of friend's ability. Second, I describe how friendship is related to cognition of self and friends, referring to studies of friendship and choice of friends in early childhood. Third, in respect of the social comparison processes and self-evaluation maintenance models, I discuss the features of young children's self- and friend-cognition. The review of related research suggests that young children might compare the ability of themselves with those of other children, and choose friends on the basis of the comparison.

Key words: self, friend, friendship choice, social comparison, young children

キーワード：自己、友人、友人選択、社会的比較、幼児

「子どもは“能力”の観点から他者を認識し、それを考慮して友人を選択するのか。」この疑問が本研究の出発点である。大人についてはこの疑問に対し、いくつかの例で回答を示すことができるだろう。例えば、テスト勉強をするのであれば、自分より頭の良い友人と一緒に勉強したいと考えるかもしれない。また、スノーボードをするなら、自分より上手な友人と行ってコツを教えてもらったり、自分と同程度の友人と競い合ったり、自分より下手な友人と行って優越感に浸ったりしたいと考えるかもしれない。このような実際に起こりうる例から考えると、大人が自己の能力を鑑みて友人を選択している姿は想像に難くない。それでは子どもに関してはどうかだろうか。例えば、かけっこが速いと自分をみなしている子どもは、自分よりかけっこの速い友人と遊ぶのであろうか、それとも遅い友人

と遊ぶのであろうか。このように、友人選択は、自己認識や他者（友人）認識と密接に関わっているように思われる。

そこで本稿では、大きく分けて、子どもの自己認識と他者（本研究では特に友人）認識、友人関係とその選択要因、自己と他者の能力評定とそれらの比較傾向の3点について、関連する先行研究を概観しながら、先の疑問についての答えを探ることにする。そして、得られた示唆から今後の研究可能性を展望する。具体的には、まず自己認識・他者認識の中でも、特に能力の評価的側面に焦点を当てた自己評価と他者評価を取り上げ、その概要について説明を行う。次に、友人認識や友人選択に関する研究を通じて子どもの自己認識・友人認識が友人関係とどのように関連しているかについて述べる。その後、自他の能力比較の観点から、

子どもの自己認識と友人認識の特徴を記述する。そこでは自他の能力比較と友人関係に関わりが深い、社会的比較理論 (Festinger, 1954) や自己評価維持モデル (Tesser & Campbell, 1983) を取り上げる。以上のように、自己認識や友人関係に関する発達プロセスについて、従来とは異なる視点からアプローチすることは、各領域の研究に新たな知見を加え、今後の研究に対する興味深い示唆を導き出すことができると期待される。

なお、本研究では、特に幼児期の子どもに焦点を当てる。幼児期に注目する主な理由として、自己認識が明確に形成され始めるのが幼児期以降であり、この頃から他者との比較によって自分を評価するようになると考えられていることが挙げられる (e.g., 高田, 2004)。加えて、発達の初期段階である幼児期の友人関係は、児童期や青年期の友人経験に大きく影響すると言われているため (e.g., Snyder, West, Stockemer, & Gibbons, 1996)、幼児期の子どもを対象とすることは非常に重要な意味を持つと考えられる。

1. 自己認識と友人認識

自己についての認識は心理学の主要な研究テーマとして今日まで扱われてきた。James (1892/1992) の“知る主体としての自己”と“知られる客体としての自己”に関する指摘から始まった自己に関する研究は、Cooley の“鏡映自己”や Mead の“*I* と *me*” からなる自我”などの考えのもととなり、その後の自己に関する研究に多大な影響を及ぼした (梶田, 1994; 榎本, 1998)。そしてその多くが、自己は社会性を持ち、他者との相互作用によって自己が知覚・形成されるという観点に立っており、自己と他者は密接に関連しているという考えを導き出している。このように、自分がどのような人物かという自己認識と他者がどのような人物かという他者認識は相互に結びついていると考えられる。それゆえ、自己について述べるのであれば、相互作用を行う対象である他者についても考慮に入れる必要がある。

また、このような特徴は特に親密な他者のかかわりにおいて顕著に現われるとされており (Damon, 1983/1990; 柏木, 1983)、自己認識は親密な対人関係に左右されるという主張が一般になされている。親密な対人関係として、親子関係や恋人関係、友人関係が挙げられるが、その中でも特に友人関係は、個人の意思によって選び、築かれる関係であると言われている (遠矢, 1996)。友人関係研究の中には、特にこのような友人の“選択”といった特徴に注目したものがあ

る。友人選択研究は、人がどのような友人を好んで選択するのかを明らかにすることを目的としており、多くの研究が自己と友人との性質の比較の観点から実施されている (e.g., Hartup, 1983)。また、Festinger (1954) が提唱した社会的比較理論や Tesser & Campbell (1983) が説く自己評価維持モデルに代表される社会的比較に関する研究は、自他の能力や特性の比較と友人関係の関連性について検討している。これらの研究は、自己を基準として他者を認識することで友人関係は構築され、変化するという考えに基づいており、自己認識や他者認識 (特に友人認識) が友人関係や友人選択に大きな影響力を持つことを示唆している。

1-1. 幼児期における自己評価

自己認識の中でも特に、自己の能力や特性に対する評価的側面に焦点を当てたものは自己評価と呼ばれている。一般に幼児の自己評価は甘く、現実とはかけ離れて自己を高く評定する傾向が見られることが指摘されている。

例えば、Hansford & Hattie (1982) は、自己評価と実際の達成得点の関連についての128研究のうち、就学前児を対象とした5研究に基づいてメタ分析を行い、就学前児の自己評価と実際の達成得点の間に関連が見られないことを示している。また Nicholls (1978) は、5-13歳の子どもを対象に、自身のリーディングの成績に対する自己評価と教師評価 (実際の成績) の関係を調べている。その結果、年少児ほど実際の成績よりも自己評価を高く設定し、年齢を重ねるごとに実際の成績との一致度が増すようになり、教師評定との相関が高くなることを示唆している。加えて Weiner (1964) は、さらに下の年齢の4歳児でも、同様に自分自身を過大評価する傾向があること (ただし自身を過小評価する子も多少存在する)、社会的に望ましい特性に関しては一段と顕著な傾向を示すことを報告している。

幼児期・児童期の自己の評価的側面の理解に関して調査している佐久間 (保崎)・遠藤・無藤 (2000) では、幼児は自己の肯定的側面 (好き・良いところ) のみを描写する傾向にあり、加齢に伴い、否定的側面 (嫌い・悪いところ) に関する描写も増加していくことを明らかにしている。この研究結果も、幼児が自己を過度に肯定的に評価する側面を持つ傾向にあることを示していると言えるだろう。

こうした結果に対し、Harter & Pike (1984) は、パズルが上手、かけっこが速いといった、幼児にとって想像しやすい具体的な能力場面を用いれば幼児は正確な自己評価が行うことができると考え、描画を用いた子どもの自己知覚 (有能感と社会的受容感) を測定

する尺度 (Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children) を開発し調査を行った。調査結果から、幼児の自己評定値と教師評定値の間には社会的受容感に関しては有意な相関は見られなかったが、有能感 (学習面と運動面) に関しては有意な相関がみられ、子どもの自己能力知覚が実際の能力を反映するものであることを示唆している。また、桜井・杉原 (1985) は、Harter & Pike (1984) を参考に、日本の幼児 (年長児) 向けの自己知覚を測定する描画尺度を作成し、その信頼性の検討を行った。その結果、年少児を対象にしていない、妥当性を検討していないといった問題点がいくつか残されているものの、ある程度の信頼性は確かめられている。

このように、幼児の自己評価は過大評価傾向にあるという一般的な知見は認められるものの、それに対する反証も存在し、一貫した研究結果が得られていない。これに関して金城・前原 (1991) は、自己評価反応の発達的な個人差の存在といった問題点を指摘し、ピアジェの認知的発達段階の観点から幼児の能力評価の反応特徴と実際の能力および認知能力との関連を検討している。その結果、幼児は自己能力を高く楽天的に評定する傾向にあるが、その程度には個人差があり、極端に高く評定する者もいれば、適度に高く評定したり、否定的に評定したりする者も存在すると述べている。その中でも自己能力を適度に高く評価する幼児は現実に即した評価ができる者であり、同じ前操作期にある幼児においても、より発達した認知能力を有していると結論付けている。

1-2. 幼児期における他者評価

他者評価に関しては、自己評価とは異なり、幼児でもかなりの確に能力評価や将来の成功・失敗の予測を行うことができると言われている (柏木, 1983)。

例えば、Stipek & Hoffman (1980) は、運動課題場面において成功、失敗、成績向上を経験した後、その後の自己および他児の成績を3-8歳児がどのように予測するかについて実験を行った。その結果、自己に関しては3, 4歳では過去の経験に基づいた予測を行うことができず、失敗した後でも高い成績予測を行ってしまうという、その他の自己評価研究と類似した結果が得られた。それに対し、他児については3, 4歳の時点で成功および失敗の情報に基づいてその後の成績に対する予測を行うことができると示唆された。すなわち、就学前児でも、他の子どもの能力評価に関しては、その子の過去の成績を反映した能力評価や将来の成績の予測をかなり妥当なレベルで行えることが明らかになっている。

また、幼児でも他者の行動を観察することで、自発

的に他者の行動を予測したり内的特性を推測したりできるという知見もあるように (松永, 2002)、可視的で客観的な内容に関しては、幼児は他者を適切に認識できることが分かる。自己評価に関しては、評価する自分と評価される自分とを分離して評価しなければならないのに対し、他者評価に関しては、他者は最初から客観的な対象であるため、目に見える結果をそのまま評価すればよいと推測できる (柏木, 1983)。このような過程の違いが自己評価と他者評価の困難さの違いに繋がるのではないかと考えられる。

1-3. まとめ

幼児の過度に高い自己評価は認知発達の未熟さによるものであり、前操作期に入ったばかりかそうでないかによる多少の個人差はあるものの、その評価傾向は発達上当然のことである。その一方で、Harter & Pike (1984) の結果から、幼児が想像しやすいつい具体的な状況を設定することで、幼児はある程度正確な自己評価を行うことができるという知見を導き出すことができる。また、他者に関して幼児はかなり正確に評価できることが示されており、客観的な対象に対する評価は正確に行うことができると推測される。

本節では自己評価と他者評価に関する文献を概観してきたが、内容上それぞれ独立したものとして説明を行った。しかしながら前述のように、自己認識と他者認識は密接に結びついていると考えられているため、その関連性を考慮に入れて検討を行う必要がある。よって以降は、自己と他者の関連性を踏まえながら、友人選択および社会的比較に関する研究を概観していく。

2. 友人選択と自己認識・友人認識

2-1. 幼児の友人認識

従来、子どもの友人あるいは友情に対する認識は、認知発達と共に、段階的に発達すると捉えられてきた。例えば Bigelow ら (Bigelow, 1977; Bigelow & LaGaipa, 1975) は、6歳から14歳の子どもに対し、「親友とはどんな人か」「親友に期待することは何か」といった質問を行い、得られた回答から以下の3段階の友情概念の変遷を示している。それによると子どもは、初めは地理的・物理的に近くにいる、共通の活動を行う子 (段階1: 7-8歳) を友人とみなすものの、その後、価値観や社会的規範を共有できる誠実な子 (段階2: 9-10歳)、共通の興味や自己開示を通じて相互理解し合える子 (段階3: 10-12歳) へと友人に対する認識や期待を変化させるとしている。

同様に、Selman (1981) は、社会的認知発達の立

場から、子どもの友情概念の発達を5段階で説明しており、以下の段階を踏んで友人関係や友情に対する理解を変容させるとしている。すなわち子どもは、段階0（一時的・物理的關係：3-7歳）では家が近く、そのときまたま一緒に遊んでいる子を友人とみなすが、段階1（一方向的關係：4-9歳）では自分の好きなことを一緒にしてくれる子を友人とみなす。そして段階2（都合の良いときだけの關係：6-12歳）で友情を互惠的なものとみなすようになるが、不都合なことやネガティブな出来事が生じた場合は互惠性が失われ、關係は容易に終わってしまうと考える。その後、段階3（相互親密的・相互援助的關係：9-15歳）で友情は連続性と愛情の絆を持つものであり、友情によって親密性と相互援助が発展し、葛藤が生じても關係は終わらないと考えるようになり、最後の段階4（自律的・相互依存的關係：12歳頃から青年期）で互いの独立と依存の両感情の統合を通じて友情は発展するという感覚を持つに至る。

一方、Berndt (1981) は、初期の友情概念がそれ以降の概念によって受け入れられなくなるのではなく、新旧の友情概念は並存すると考えたため、友情概念の発達を段階的には捉えなかった。Berndt (1981) のインタビュー結果から得られた各年齢段階の友情概念に関する特徴的な描写としては、幼児では“特徴の定義 (e.g., 彼は私のことが好き)” “遊び・交際 (e.g., 一緒に遊ぶ)”, 3年生では“向社会的行動 (e.g., 遊びに誘ってくれる)” “攻撃行動 (e.g., 攻撃的をしない)”, 6年生では“親密さ・信頼 (e.g., なんでも話せる)” “忠実な支持 (e.g., 陰口を言わない)” “誠実さ (e.g., いつも一緒にいる)” がそれぞれ挙げられる。

発達過程の捉え方に違いは見られるものの、これらの見解から導かれる子どもの友人および友情に対する認識は、特に幼児期や児童期初期においては、表面的な情報や物理的な近接性を基に形成される傾向にあることを示唆している。また同時に、一時的（たまたま一緒に遊んでいるから友人になる）で一方向的（“自分が”好きなこと、したいことを一緒に活動するから友人になる）な特徴を持ち、友人關係の本来の特徴である、自己と友人の要求を相互に満足させる持続的で互惠的な關係は、発達段階初期では見られないと主張している。

2-2. 子どもの友人選択要因

子どもの友人（遊び相手）選択について述べたレビュー (Epstein, 1989; Hart, McGee, & Hernandez, 1993) によると、子どもの友人選択には近接性、年齢、類似性の3要因が影響を及ぼしており、発達段階に応じてこれらの重要性は変化するという。近接性とは物

理的な距離を指し、年少児は近くにいる子どもを友人として選択するが、その傾向は年を経るにつれて徐々に減少する。年齢に関しては、幼児期には年長児を友人として選択する傾向にある（積極的に選択しているかどうかは疑問が残る）が、児童期には同年齢の子どもを友人として選択するようになるとする見解が主流である。類似性は子どもの諸特徴や興味の方向の相違についてのものであり、年少児は居住地や年齢あるいは好きな遊びが同じといった表面的特徴を友人選択の基準とするが、年長になるにつれて性格や特性といった内面的特徴を基準に友人を選択するようになる。本邦の子どもに関しても、友人を選択する場合、幼児期では“相互的接近（席や家が近い、一緒に遊ぶ）”と“単純な好感・愛着”が理由の半分ずつを占めるが、小学1年生になると“相互的接近”が半分に減少し、それに代わって“人格の尊敬・共鳴”が登場することが明らかになっている（田中, 1975）。また、屋内外の遊び場が幼児の遊び相手に及ぼす影響について分析した廣瀬・志澤・日野林・南 (2006) は、3, 4歳児の遊び相手の選択は偶発的であり、近接性が主な要因となっていたのに対し、5歳児になると場面に応じた遊びによって能動的に相手を選択し、遊び相手を興味や関心の類似性に基づいて選択することを明らかにしている。

このような見解は友人選択研究において主流のものであり、前段の友人認識に関する知見と同様に、幼児は表面的な情報に基づいた、一時的・一方向的で単純な友人選択しか行えないことを表している。しかし一方で、幼児期における互惠的で持続的な友人關係の存在を示唆する研究もいくつか存在する。

例えば Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin (1985) は、幼児が他児と遊ぶ場面を2つの時期（対象児が42ヶ月のときと50ヶ月のとき）にわたって実験的に観察し、幼児の友情を短期間の關係以上のものであると示唆している。また、Howes (1983) は、安定した仲間集団に属する幼児を対象とした保育所での生活場面に関する観察から、幼児が互惠的な友情を築くことを明らかにしている。同様に、Hayes, Gershman, & Bolin (1980) は、自由遊び場面における幼児の友人に対する行動について観察を行い、一方的に選択した友人よりも相互に選択し合った友人に対して、幼児は好意的な反応を表出しやすい傾向があると示している。さらに原 (1995) は、遊び、援助、信頼の各構成場面で“友だち”と“知っている子”に対する行動予測と自分の意図について幼児に判断させた結果、幼児は少なくとも行動的側面に関しては友人關係を互惠的な關係として理解している可能性がある」と述べている。

2-3. まとめ

幼児の友人関係および友人選択については、近接性に代表されるような、表面的な情報を基盤とした一時的・一方向的で単純な選択によるものとみなす見解が主流である。その一方で、幼児が成熟した（あるいは複雑な）友人選択を行える可能性を示唆した研究もあり、幼児の友人選択や友情の理解に関する一般的な考えに対して、新たな観点を供給していると言えるだろう。しかしながら、そのような研究のほとんどが幼児の行動観察をもとにしたものであり、親密な対人関係の一般的な側面を反映している可能性も否定できない。

子どもの友人選択要因として挙げられている3要因の内、近接性に関しては、その特徴から自己認識と友人認識が友人選択に影響を及ぼしているとは考えにくい。これに対し年齢については、幼児期には年長児を友人として選択する傾向にあるという特徴や、世話を焼いたり焼かれたりといったニーズを満たすために異年齢の友人を選択するといった知見（French, 1984）から、自己と照らし合わせて友人を認識し、その情報をもとに友人を選択している可能性が生じる。さらに友人との類似性に基づいた友人選択を行うには、自己と友人との差異を知る必要があるため、必然的に自己と友人を比較することになる。それによって導き出される友人の表面的な情報を手がかりに、子どもは友人を選択していると考えられる。これらのことから、自己認識と友人認識が友人選択に影響を及ぼしていると推測することは十分可能であろう。しかしながら、年齢や類似性に関する研究はほとんどが児童を対象にしたものであるため、今後幼児期の子どもを対象にした検討を行う必要があるだろう。

3. 社会的比較と自己認識・友人認識

3-1. 社会的比較理論の概要

Festinger (1954) が提唱した社会的比較 (social comparison) は、“自分と他者を比較すること”と定義づけられる。Festinger (1954) は、人間には自分の意見や能力を正確に評価しようとする動因があり、物理的客観的基準が利用できない場合に自分の意見や能力を他者の意見や能力と比較することで自己評価を行い、そのような比較は自分と意見や能力が類似した他者との間で行われるとしており、これらの考えをもとに社会的比較過程理論を展開している。近年では、この社会的比較が、自己評価や自己高揚などといった種々の機能に役立つことが指摘されている（外山, 2001）。

人間は、適応的な社会生活を送るために、このような社会的比較を通じて能力や意見に関する正確で妥当な自己評価を得ようとする欲求を持っている。しかし一方で、社会的比較は、正確で妥当な自己評価を求めるためだけでなく、自己をより好ましい存在として認識するために作用する場合もある（高田, 2004）。すなわち、常に自分と類似した他者を比較対象として選択するわけではなく、自分より優れた他者あるいは劣った他者を比較対象として選択することで、自己評価を高めようとする機能も併せ持つ。前者がFestinger (1954) で述べられている上方比較であり、後者はWills (1981) が提唱した下方比較である。

上方比較は、自尊感情が高まっている場合や自己の能力を向上させようとする自己向上動機が作用する場合に、自分より優れた、望ましい状態にある他者を比較対象として選び、比較を行うものである。この種の比較は、「能力や成績は高ければ高いほうがいい」という向上性の圧力（Festinger, 1954）によって引き起こされ、比較他者をしのごうとすることで自己の能力を向上させようとする性質を持っている。一方、下方比較は、自己評価（自尊心）が脅かされるかもしれないとき、自分よりも不幸な他者、能力が劣った他者と比較することで、主観的幸福感を得たり、間接的に自己評価を高めたりする比較形態である（Wills, 1981）。これは自尊心を維持高揚するために肯定的な自己評価を抱こうとする自己高揚動機に基づいている。ゆえに今日では社会的比較は、自己と類似した他者と比較を行うことで正確な自己認識を獲得する自己評価、自分より優れた他者と比較を行うことで自己を高める自己向上、自分より劣った他者と比較を行うことで自己を維持高揚させる自己高揚の3つの機能を持つという見解が多数を占めている（Wood, 1989, 1996; 高田, 2004）。

3-2. 幼児期の社会的比較

高田 (2004) のレビューでは、社会的比較を自分と他者の相対的位置関係という基準に則って自己評価を行うものと考えた場合、認知発達の未成熟さゆえに、およそ8, 9歳以下の子どもは自己の認識や評価の手がかりとして社会的比較をあまり用いていないと述べている。しかしながら、社会的比較に基づいて明確に自己評価を行わないとしても、周囲の他者から得た情報に応じて自他の比較を行うことは十分考えられるともしている。

幼児の日常の比較行動に着目したMosatche & Bragonier (1981) は、保育園での観察で得られた幼児の社会的比較に類する発言を比較の内容と機能に分類し、その生起頻度について調査した。その結果、比

較の機能としては“弁別・類似”(e.g.,「あなたは石鹸のパイを作っているけど、私は石鹸のシチューを作っているの」と“競争”(e.g.,「僕は司令官だ。隊長よりすごいんだよ」)が有意に多かった。この結果は、幼児が日常的な他者との比較に競争的な視点を持ち込んでいることを意味し、他者より自分のほうが優れていると自分自身をみなすことで満足を得ようとする自己高揚的な比較を行っていると言える。また、Butler (1989a,b)によると、幼児は様々な技能を習得するために他者の遂行を知ろうとしたり、課題達成に必要な情報を獲得したりするための比較を行うという。このような技能習得や学習を目的とした比較は、自分の能力を高めようとする自己向上的な比較であると考えられている (Butler, 1992; Wood, 1989)。

3-3. 自己評価維持モデル

自己と他者との比較に関する論説のなかでも、特に自己評価の維持や高揚、比較他者との関係に焦点を当てたものに Tesser & Campbell (1983) の自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model: SEM モデル) がある。SEM モデルは、人間は肯定的な自己評価を維持・高揚しようと動機づけられ、その自己評価は他者との関係に影響を受けるといった基本的仮説に基づいており、他者との心理的距離、他者の遂行レベル、活動に対する関与度の3変数によって規定される。このモデルにおいて自己評価は、心理的距離の近い他者の優れた遂行によって自己評価が上昇する反映過程と心理的距離の近い他者の優れた遂行によって自己評価が低下する比較過程の2つの過程を経て変動するとされている。どちらのプロセスが生起するかは、活動に対する関与度に左右される。すなわち、関与度が低い活動において心理的に近い他者の遂行が優れている場合には、反映過程が生起し、その他者との同一視を通じて自己評価が上昇する。一方、関与度が高い活動において心理的に近い他者の遂行が優れている場合には、比較過程が生起し、その他者と自己を対比することで劣等感を感じ自己評価が低下する。そして自己評価が低下した場合には、他者と距離を置いたり遂行レベルや関与度を変化させたりといった行動調整を行うことで、自己評価を維持すると考えられている。

Tesser, Campbell, & Smith (1984) は、SEM モデルから導かれた、自己と他者(クラスメイト)が心理的に近い場合、関与度の高い活動では他者よりも自分のほうが優れていると認知し、関与度の低い活動では自分よりも他者のほうが優れていると認知するという仮説を検証することで、小学校高学年児童の自己評価と友人関係の関連について検討を行っている。その結

果、SEM モデルの予測通り、児童は、関与度が高い場合には心理的に近いクラスメイトよりも自分のほうが優れていると評価し、関与度が低い場合には心理的に近いクラスメイトを自分よりも優れていると評価していた。この結果から、小学校高学年児童が自己評価を維持できるような友人を好んで選択していることが示唆された。このような友人選択における自己評価維持機能はさらに下の年齢(3, 4年生)でも確認されている(磯崎, 1994)。

3-4. まとめ

幼児は、認知発達の未成熟さゆえに自己の認識や評価の手がかりとして社会的比較を用いることは少ないが、日常的に他者の遂行を参照し、自己と他者を比較することはよく行っている。こうした比較行動は、自尊心を高めたりその低下を防止したりする自己高揚機能や自分自身の能力を高めたり改善したりする動機を充足する自己向上機能を持つとされている。なお自己高揚機能は下方比較、自己向上機能は上方比較にそれぞれ対応すると捉えられている (Wood, 1989)。

SEM モデルと友人関係についての研究は、小学生や中学生を中心に行われており、幼児を対象にしたものは現在見当たらない。その理由として、他者との比較が自己評価に影響を及ぼすのは児童期中期(8, 9歳)以降であり、幼児期や児童期前期には他者との比較と自己評価に関連が見られない (Ruble, Boggiano, Feldman, & Loebel, 1980) ため、他者との比較による自己評価の変動について検討を行う SEM モデルの調査対象として幼児は適していないとみなされているのではないかと推測される。しかし、幼児の実際の遊び場面では、「○○ちゃんは私より上手」「負けるから一緒に遊びたくない」といったように、自分と相手の能力を比較して語る姿を時折観察できる。自己評価の変動を実証的に調査したわけではないため、厳密にはこの例に対して SEM モデルを適用することはできない。しかし、上述の幼児の比較行動やそれに伴う機能の観点からもわかるように、幼児が自己評価や自身の性質をもとに友人を評価し友人を選択している、あるいは自分が楽しく遊べるような(自尊心を維持できるような)友人を選択しているといった可能性を導き出すことはできると考えられる。

4. 今後の展望

これまで概観してきた研究を踏まえ、本研究の今後の展望を簡単に記す。

先行研究から、幼児が自己と他児を比較し、その情報に基づいて友人を選択している可能性が示唆され

た。今後は、幼児が他児と比較する特性やその基準に対して詳細な検討を行う必要がある。そしてその特性がもし能力であるなら、幼児が能力によって他者を認識し、それをもとに友人を選択していることの証左となるであろう。

また、幼児の中には極端に自己を高く評定する者もいれば、適度に高く評定したり、否定的に評定したりする者も存在する。中でも特に自己を否定的に評価する子どもは、自己の否定的な側面に焦点を当てすぎることで健全な友人関係が築けず、社会的不適応を引き起こすかもしれない。このような子どもの自己評価メカニズムと友人関係について探究することは、教育的に意義深いと考える。

最後に、社会的比較に関する研究には、社会的比較行動がその後の行為や関係に及ぼす影響についてほとんど検討されてこなかったという問題が存在する(Blanton, Buunk, Gibbons, & Kuyper, 1999; 外山, 2006)。先に述べた例のように自己と友人を比較した結果、幼児が特定の友人を自分にとって望ましくない相手と評価した場合、その友人と遊ぶのをやめて他の子と遊ぶことを選択するかもしれない。このように社会的比較行動が実際の友人選択に影響を及ぼしていることを明らかにすることができれば、友人選択研究、社会的比較研究双方に対して新しい見解を示すことができるであろう。

【引用文献】

- Berndt, T. J. (1981). Relations between social cognition, nonsocial cognition, and social behavior: The case of friendship. In J. H. Flavell, & L. Loss. (Eds.), *Social cognitive development* (pp.15-45). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bigelow, B. J. (1977). Children's friendship expectations: A cognitive-developmental study. *Child Development*, 48, 246-253.
- Bigelow, B. J. & LaGaipa, J. J. (1975). Children's written descriptions of friendship: A multidimensional analysis. *Developmental Psychology*, 11, 857-858.
- Blanton, H., Buunk, B. P., Gibbons, F. X., & Kuyper, H. (1999). When better-than-others compare upward: Choice of comparison and comparative evaluation as independent predictors of academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 420-430.
- Butler, R. (1989a). Interest in the task and interest in peers' work in competitive and noncompetitive conditions: A developmental study. *Child Development*, 60, 562-570.
- Butler, R. (1989b). Mastery and ability appraisal: A developmental study of children's observations of peer's work. *Child Development*, 60, 1350-1361.
- Butler, R. (1992). What young people want to know when: Effects of mastery and ability goals on interest in different kinds of social comparisons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 934-943.
- Damon, W. (1990). 社会性と人格の発達心理学 (山本多喜司, 編訳・浅川潔司・有馬道久・岡直樹・川瀬泰治・古川雅文・谷本忠明・南博文, 訳). 京都: 北大路書房. (Damon, W. (1983). *Social and personality development*. New York: W. W. Norton.)
- 榎本博明. (1998). 「自己」の心理学—自分探しへの誘い—. 東京: サイエンス社.
- Epstein, J. L. (1989). The selection of friends. In T. J. Berndt & G. W. Ladd. (Eds.), *Peer relationships in child development* (pp.158-187). New York: Wiley.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- French, D. C. (1984). Children's knowledge of the social function, younger, older, and same age peers. *Child Development*, 55, 1429-1433.
- Hansford, B. C., & Hattie, J. A. (1982). The relationship between self and achievement/ performance measures. *Review of Educational Research*, 52, 123-142.
- 原孝成. (1995). 幼児における友だちの行動特性の理解—友だちの行動予測と意図—. *心理学研究*, 65, 419-427.
- Hart, C. H., McGee, L., & Hernandez, S. (1993). Themes in the peer relations literature: Correspondence to playground interactions portrayed in children's literature. In C. H. Hart. (Ed.), *Children on playgrounds: Research perspectives and applications* (pp.371-416). Albany: State University of New York Press.
- Harter, S. & Pike, R. (1984). The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- Hartup, W. W. (1983). Peer relations. In P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol.4* (pp.104-196). New York: Wiley.
- Hayes, D. S., Gershman, E., & Bolin, L. J. (1980). Friends and enemies: Cognitive bases for preschool

- children's unilateral and reciprocal relationships. *Child Development*, **51**, 1276-1279.
- Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. (1985). Incidence of "friendship" and behavior toward strong associates versus nonassociates in preschoolers. *Child Development*, **56**, 234-245.
- 廣瀬聡弥・志澤康弘・日野林俊彦・南徹弘. (2006). 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係. *心理学研究*, **77**, 40-47.
- Howes, C. (1983). Patterns of friendship. *Child Development*, **54**, 1041-1053.
- 謝 文慧. (1999). 新入幼稚園児の友だち関係の形成. *発達心理学研究*, **10**, 199-208.
- 磯崎三喜年. (1994). 児童生徒の自己評価維持機制的発達的变化と抑うつとの関連について. *心理学研究*, **65**, 130-137.
- James, W. (1992). 心理学 (上) (今田 寛, 訳). 東京: 岩波書店. (James, W. (1892). *Psychology: Briefer course*.)
- 梶田叡一. (1994). 自己意識心理学への招待—人とその理論—. 東京: 有斐閣.
- 柏木恵子. (1983). 子どもの「自己」の発達. 東京: 東京大学出版会.
- 金城洋子・前原武子. (1991). 幼児における自己能力評価—認知能力および教師評定との関係—. *教育心理学研究*, **39**, 400-408.
- 松永あけみ. (2002). 幼児は他者の内的特性をどのようにとらえるのか. *発達心理学研究*, **13**, 168-177.
- Mosatche, H., & Bragonier, H. (1981). An observational study of social comparison in preschoolers. *Child Development*, **52**, 376-378.
- Nicholls, J. G. (1978). The development of the concepts of effort and ability, perception of academic attainment, and the understanding that difficult tasks require more ability. *Child Development*, **49**, 800-814.
- Ruble, D. N., Boggiano, A. K., Feldman, N. S., & Loebel, J. H. (1980). Developmental analysis of the role of social comparison in self-evaluation. *Developmental Psychology*, **16**, 105-115.
- 佐久間(保崎)路子・遠藤利彦・無藤 隆. (2000). 幼児期・児童期における自己理解の発達: 内容的側面と評価的側面に着目して. *発達心理学研究*, **11**, 176-187.
- 桜井茂男・杉原一昭. (1985). 幼児の有能感と社会的受容感の測定. *教育心理学研究*, **33**, 237-242.
- Selman, R. L. (1981). The child as friendship philosopher. In S. R. Asher, & J. M. Gottman (Eds). *The development of children's friendships* (pp.242-272). Cambridge: Cambridge University Press.
- Snyder, J., West, L., Stockemer, V., & Gibbons, S. (1996). A social learning model of peer choice in the natural environment. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **17**, 215-237.
- Stipek, D. J., & Hoffman, J. M. (1980). Development of children's performance-related judgments. *Child Development*, **51**, 912-914.
- 高田利武. (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学—自己・社会的比較・文化—. 京都: ナカニシヤ出版.
- 田中熊次郎. (1975). *新訂 児童集団心理学*. 東京: 明治図書.
- Tesser, A., & Campbell, J. (1983). Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds). *Psychological perspectives on the self, Vol.2* (pp.1-31). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 561-574.
- 外山美樹. (2001). 幼児・児童における社会的比較の発達的变化—認知, 感情, 行動の観点から—. *教育心理学研究*, **49**, 500-507.
- 外山美樹. (2006). 社会的比較によって生じる感情や行動の発達的变化—パーソナリティ特性との関連性に焦点を当てて—. *パーソナリティ研究*, **15**, 1-12.
- Weiner, P. S. (1964). Personality correlates of accuracy of self-appraisal in four-year-old children. *Genetic Psychology Monographs*, **70**, 329-365.
- Wills, T. A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- Wood, J. V. (1989). Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, **106**, 231-248.
- Wood, J. V. (1996). What is social comparison and how should we study it? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 520-537.

(主任指導教員 湯澤正通)